

特集 都道府県における取組

福井県における伝統地場農産物品種の収集・保存・配布の取り組み

福井県農業試験場園芸部 主任研究員 早川 嘉孝

1. 伝統地場農産物品種の収集・保存・配布の経緯

本県の伝統地場農産物については、昭和61～平成2年度に農業試験場と各農林事務所が主体となって「ふるさと特産野菜優良系統育成事業」で県内で古くから自家採種により栽培されている野菜の優良系統選抜試験が実施された。

この時の栽培品目を参考に平成10年度に自主的な調査研究グループ「ふるさと野菜の会」会員によってより多くの品種についての調査活動が行われ、「ふくいの伝統野菜」が執筆、出版された。これを契機に、伝統地場農産物のふるさとの味としての評価に対する見直し（伝統野菜をもっと食べたい、興味がある、作ってみたいという）の気運が生まれる一方、生産現場では栽培農家数の減少や長年の自家採種で本来の特徴を失ってしまうことが危惧され、伝統地場農産物本来の形質維持と保存を県に要請する声が徐々に高まってきた。

このため、県では平成14年度から「伝統地場農産物等原種供給事業」を立ち上げ、県内各地域の伝統地場農産物品種の収集、栽培、選抜、保存を行い、現場の要望に応じて種子等を配付している。

事業の内容は、図1のとおりであり、

- ①県下6カ所の各農林総合事務所等で各地域の実態調査、種子等の収集
- ②集めた種子等は福井農試の防虫ネット被覆ハウスおよび組織培養室で増殖栽培を行い、形や色、味等が本来の特性に近いものを選抜し、原種として保存
- ③栽培、採種は各産地が行うが、形質の変化や万一、種子等が途絶えた場合、これを原種として福井農試が供給する

当該事業で保存している作物および品種は、表1のとおりである。

伝統地場農産物等原種供給事業で現在、保存している品種は、伝統地場農産物と合わせて福井農

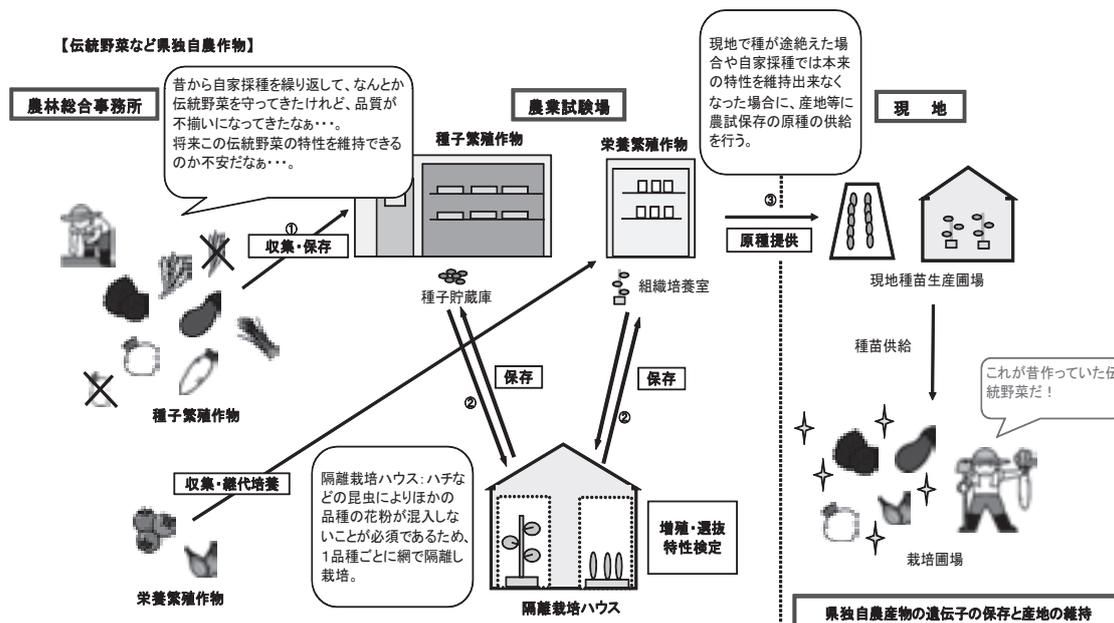


図1 伝統地場農産物等原種供給事業のフローチャート

試育成品種がある。これらの品目を栽培して維持、増殖し、生産農家等へ供給している。

保存温度は、遺伝資源として保存庫において長期保存に耐えるよう - 2℃に設定している。

2) 原種の維持・更新

2. 伝統地場農産物品種の収集・保存

1) 収集・保存

原種の収集は各農林総合事務所をとおして平成14～16年の3年間で実施してきた。

① 種子繁殖性の種

採種用ハウス内に防虫ネット(0.8mm目)を被覆した囲いを作り、交雑の防止に努めている。

さらに同一「科」の作物交雑を防止するために

表1 保存・配布している伝統地場農産物等一覧

作物名	品種名	繁殖方法	特徴
ナス類	妙金ナス	種子	肉質が締まっており小ナスの間に収穫し食する。煮物にしても煮崩れしない。
	吉川ナス	種子	賀茂ナスの先祖と言われる丸ナス。肉質がよく締まっていて緻密。
	立石ナス	種子	外皮も肉質も軟らかい中長ナスで一夜漬けに適する。
	新保ナス	種子	肉質が緻密な丸又は、卵形ナスで焼き物、煮物に適する。
ウリ類	カワズウリ	種子	蛙の背中の様などでこぼこした肌をしており一夜漬けにすると、はもろく甘い。
	カタウリ	種子	果肉が厚く、よく締まっており奈良漬けに向く。
シソ	木田チリメンジソ	種子	赤色のちりめん状のシソで芳香が強く、色付きがよい。
ネギ類	明里ネギ	種子	分けつが旺盛で、葉は柔らかく、甘い。
	谷田部ネギ	種子	栽培方法により軟白部が釣り針状にまがっているのが特徴で柔らかい。
カブ類	穴馬カブ	種子	根は肩からこしにかけて赤紫色で、根部の肉質は柔らかい。
	嵐カブ	種子	根は肩からこしにかけて赤色で、葉、根部ともに柔らかい。
	河内赤カブ	種子	根は濃紅色で、扁平な形であり肉質は硬いが緻密でほろにがさと甘みが独特である。
	杉箸アカカンバ	種子	根部の表皮は深紅色で、肉質は硬く独特の甘みと香りがある。
	古田刈カブ	種子	純白で光沢良く、肉質は柔らかく甘み多く、葉も柔らかい。
	山内カブ	種子	根は肩からこしにかけてやや緑色で、肉質は緻密で非常に硬い。
ツケナ類	勝山水菜	種子	早春の融雪期にとう立ちしてくる茎を蕾が見え始めるころに収穫し食する。みずみずしく甘い。
	菜おけ	種子	とう立ちしてくる茎を蕾が見え始めるころに収穫し、浅漬けにして食する。
	四月菜	種子	四月に収穫される独特の苦みを持ち、あげ等と煮物にすると特においしい。
	マナ	種子	蕾がまだ固く茎の柔らかいうちに手で折とって浅漬けとして食する。ほろ苦い独特の風味がある。
ダイコン	板垣ダイコン	種子	細根で収穫したものを、日陰で一日干し、糠漬けで食べる。甘みと辛みが調和して美味しい。
ソバ	美山在来ソバ	種子	県内で最も収穫時期が早く、10月中旬に収穫できる。
	大野在来ソバ	種子	県内産のソバの中でも収量が多く、食味も良い。
	今庄在来ソバ	種子	県内産のソバの中でも収量が多く、食味も良い。
ラッキョウ	福井在来	栄養	3年栽培を行っており、小粒で肉質がきめ細かい。甘酢漬けにして食する。
サトイモ	大野在来	栄養	丸いもので肉質が緻密であり、煮崩れしない。
メロン	ハーブレディアー(母)	種子	つる割れ病抵抗性であり、果肉は緑色でありネットの張りも安定している。
	ハーブレディアー(父)	種子	
トマト	越のルビー	栄養	果皮はやや硬いが糖度の高い中玉種である。
ラッキョウ	越のパール	栄養	ラッキョウとネギの交雑した種間雑種品種である。
	越のレッド	栄養	ラッキョウと赤玉ネギの交雑した種間雑種品種である。
ラッキョウ ×ヤマラッキョウ	オータムヴィオレ	栄養	ラッキョウと山ラッキョウの交雑した種間雑種品種である。紫色の、秋に咲くアリウム属の花。
ラナンキュラス	ガーデンスター	栄養	黄色とクリーム色の2色の八重花で春に咲く。
ラッキョウ ×ヤマラッキョウ	オータムヴィオレ2号	栄養	ラッキョウと山ラッキョウの交雑した種間雑種品種である。紫色の、秋に咲くアリウム属の花。
	オータムヴィオレ3号	栄養	ラッキョウと山ラッキョウの交雑した種間雑種品種である。紫色の、秋に咲くアリウム属の花。
	オータムビオレミニ	栄養	鉢栽培ができるオータムヴィオレの小型の花。
	オータムビオレミニピンク	栄養	オータムヴィオレミニの色の変異種。桃色の、秋に咲くアリウム属の花。

ハウス内での栽培は同一年では一品種のための栽培にとどめている。(写真1)



写真1 採種用ハウス内の防虫

・自家受粉野菜

花粉の飛散・受粉を促し、着果を助けるため、市販の簡易な振動発生器で開花当日の花房を振動させて自家受粉を行っている。

なお、ナス類は交配後、直ちに茶封筒で袋かけをして、万一、虫が侵入してきても花房に触れられないようにしている。

・両性花野菜

ウリ、メロンは、雄花の花粉を雌花の柱頭に受粉してやらないと着果しないので、人の手で確実に交配したものを速やかに茶封筒で袋かけをして、訪虫による交雑を防止している。

・他家受粉野菜

カブラ、ツケナ類は簡単に交雑してしまうので、防虫ネットで被覆した囲いの中に、

さらに、人が中に入って人工交配できる防虫ネットを被覆した囲いを作り、虫の侵入防止を二重にした栽培圃内で実施している。

人工交配は、花粉が出ているかどうかをよく確認し、細い棒の先端に綿をつけた手作りの交配用具で丁寧に行っている。(写真2)

特にカブラ、ツケナ類のアブラナ科植物は、現地で収集した時点で交雑しているため、いくつもの形質、形態のものが出現してくるので固定化が必要である。

このため、試験場内圃場で3回程度繰り返し栽培し、形質、形態ごとに区分け、整理して伝統農産物本来の形質へと固定化を進めている。



写真2 先端に綿を付けた交配用具

なお、その際には現地関係者、生産農家と試験場関係者が検討会を行い、本来の品種に近い形質、形態のものを選びだすよう努めている。(写真3)



写真3 栽培農家や普及指導員を交えての優良系統選抜

・他家受粉農産物

人工交配では着粒しにくいソバは、クロマルハナバチを利用した交配を行うため、防虫ネットの囲いの内側にさらにトンネルをかけている。

採種した種子はよく乾燥させて遠沈管に乾燥剤とともに封入し、供給用種子は種子貯蔵庫(2℃)に保存している。(写真4)

また、遺伝資源用として一部を種子貯蔵庫(-2℃)で保存する。冬期間に、保存した種子の発芽率調査を恒温庫内で行っている。

②栄養繁殖性の植物



写真4 左:保存用遠沈管 中:上から種子、乾燥剤、種子データメモ 右:種子の保存状態



写真5 栄養繁殖野菜(トマト)

現在は、トマトを除いた栄養繁殖性の野菜等については毎年、露地圃場に植替えて維持し、更新、保存のみ行っている。

トマトは、組織培養室(写真5)で継代培養を行い、栄養繁殖苗増殖・検定施設でさらに増殖し、本来の形質のものを選んで優良個体として供給している。

③原種供給

原種の供給先は、伝統地場農産物の生産されている市町の農家や組織を原則としており、各農林総合事務所をとおしての要請に基づき対応している。

現地では、福井農試から供給された原種を利用して採種を行っているが、種子を生産するための指導、助言等は福井農試も普及指導員と協力して行っている。

3. 伝統地場農産物品種の収集・保存・配布の課題

原種を正確に保存・維持することは意外に難しい作業である。

播種、定植、栽培管理、交配、採種、選別作業は、たくさんの人が係わるほど交雑・混種が多くなる。

確実な作業をするには、一人で全ての作業をすることが理想であり、交雑・混種させないという強い意識、経験が必要である。

また、栽培地の原種の増殖現場においても同じことが言える。

原種を守るという強い意識と経験を持ったマイスター的農家が必要であるが、残念ながら農家の高齢化が進み、このような農家が少なくなっている。

合わせて栽培地でも類似の野菜が栽培される機会が生じており採種圃場を維持することも、徐々に困難になってきている。

このため、現地での種子の増殖が失敗しても新たな要請に応じていつでも供給できるよう、試験場内での次回の種子更新年度まで余裕を持った種子量を確保しておくが必要になっている。

最後に、最近、県内各地域から伝統地場農産物の栽培や収穫、即売会などの話題が地方新聞の記事に掲載される機会が増えている。

風土と文化を背景に地域住民に密着して長い年月栽培されてきた伝統地場農産物は、消費者に顔の見える地域固有の商品としてさらに長く後世に伝えていけることを期待している。